

令和4年度 研究助成審査会選考結果

助成期間 令和4年7月11日～令和5年3月31日

応募は6件あり、申請書にもとづいての審査を行い、研究目的・研究計画・助成金の用途・研究業績書・指導教員の推薦書の記載にもとづき、研究内容の説明の明瞭性や研究計画・助成金の用途の妥当性などを協議した。

その結果、研究的な価値が認められ一定の水準に達していると判断された6件について採択し、1. 研究計画に示される研究方法についての明瞭性、2. 申請された助成金の用途の研究計画に対する妥当性、3. 募集要項に対する申請内容の妥当性、などを考慮し、予算上の上限額の範囲内で配分の判断を行った。

2022年5月22日 審査委員 瀧端真理子・石井英真

助成者	学年	講座	指導教員名	研究課題
ヨシオカ ヨイ 吉岡 佑衣	D1	臨床心理学講座	田中 康裕	日本人の夢感情の発達的变化に関する横断研究
フジモト コウヘイ 藤本 航平	D3	臨床心理学講座	田中 康裕	ASD者の語りの意義 —物語にならない物語について—
オカノ ヒロヒト 岡野 裕仁	M1	教育認知心理学講座	野村 理朗	社交不安と社会的比較志向性、 マインドフルネスの関連
アベ ユカリ 阿部 由香梨	D1	教育認知心理学講座	Emmanuel Manalo	Self-Efficacy of Japanese English Teachers on Critical Thinking Instruction in English Language Teaching (日本人英語教師の批判的思考力 指導に関する自己効力感に関する研究)
トウ シカン TAO ZHIHAN	M2	教育社会学講座	佐藤 卓己	大阪商船会社広報誌『海』のメディア史： 船旅にみるモダニズムとナショナリズムの 観光空間
シマミ ユキ 嶋見 優希	D3	臨床心理学講座	高橋 靖恵	オンラインと対面での描画体験の比較検討

令和4年度研究助成事業助成対象者コメント

－助成を受けて－

吉岡 佑衣

この度は令和4年度京友会研究事業に採択いただき、誠にありがとうございます。

睡眠中にみられる夢は、心理療法における治療的ツールであり「夢分析」として広く用いられてきました。私は、夢の感情面に焦点を当て、その臨床的有用性を実証的に示す研究を行っております。夢は多彩な感情を伴い、時に恐怖で跳び起きるような強烈なインパクトを持ちます。そのような夢の感情は、心理療法において有用な着目点であることが臨床家によって論じられています。さらに、夢の感情は、夢見手のパーソナリティや心理的状态と密接に関連することが明らかになっています。本研究では、夢の感情の発達的变化について知るところを目的とし、日本人の青年期、成人期、老年期それぞれのデータを比較検討します。心理療法には様々な年代の人が訪れ、心理的支援の方法として夢が用いられます。しかし、日本人の夢の感情の年代による違いや特徴について調べた研究はありません。セラピストが夢を扱う際にも、年代ごとの特徴について把握することが必要であり、本研究は夢を用いた心理的支援を行う上での基礎的な知見として有用であることが予想されます。手法として、質問紙調査やオンライン調査によってそれぞれの年代の夢に関するデータを取得し、統計的に分析します。

頂いた助成金は調査費用や、研究に関する資料の収集のための費用に充てる予定です。本研究によって得られた結果は学会発表や論文執筆によって報告いたします。ご支援に御礼申し上げますとともに、研究成果を示し、学問の発展に貢献できるよう努力して参ります。

藤本 航平

この度は令和4年度京友会研究助成事業に採択いただき、誠にありがとうございます。

私は、自閉スペクトラム症（以下 ASD と表記）者についての研究を行ってきました。その内容は、これまで ASD 者側の社会性の障害という「欠陥」に一方的に原因を帰せられがちであったコミュニケーション上の問題について、定型発達者との認知的・言語的な差異の観点から改めて取り扱うというものでした。今回の研究は、ASD 者の言語表現における意味的傾向についてより詳細に考察・検討を行おうとするものです。言語学・認知科学・臨床心理学という複数分野の文献を詳細に調査することにより、ASD 者の言語的特徴についての新たな理解と支援の可能性を示すことができれば幸いです。また、これまで長らく心理療法における意味把握方略のスタンダードを担ってきたのは所謂「物語」というパラダイムでした。本研究においてそれとは異なるような意味把握の方略について示唆することができれば、今後、臨床心理学の文脈にも深く関連してくるような興味深い知見となる可能性もあると考えられ、その点は調査者として期待しているところです。

いただいた助成金は、主に文献購入費へと充てさせていただきます。貴重なご支援に改めて深く御礼申し上げますとともに、本研究が実りのあるものとなるよう尽力していく所存です。

岡野 裕仁

この度は、令和4年度京友会研究助成事業に採択いただき、誠にありがとうございます。私は、不安や抑うつといった精神病理やネガティブ感情を軽減させるような介入やパーソナリティ特性について、質問紙調査や心理学実験を行うことを通して研究しております。

人前に出てスピーチをしたり、他者と会話をするような状況において感じる緊張や不安を社交不安と呼びます。今回実施した質問紙調査によって、社交不安が、他者と自分とを優劣の観点から比較する傾向の高さと関連することが明らかになりました。一方で、優劣の評価を含まないような他者との比較は、社交不安の高さと関連しないことがわかりました。

それでは、他人と自分とを優劣で比較しないようにするにはどうすればよいのでしょうか。そのための手法の一つとして考えられるのが、瞑想などのマインドフルネス傾向を高める介入です。マインドフルネス傾向は、“今ここ”の瞬間に意識的に気づき、評価的な判断を下さない傾向をさします。今回の調査によって、マインドフルネス傾向が高い人ほど、他人と自分とを優劣の観点から比較することが少なくなり、結果として社交不安も低くなるというモデルが示されました。

今回の研究によって、自他を優劣の観点から比較することが社交不安のリスク因子となるものの、そのような比較を行う傾向は瞑想などのマインドフルネスを高めるような介入によって軽減させられる可能性が示唆されました。この結果は、認知心理学のみならず、心理・精神科臨床にも貢献するものであると考えており、今回頂いた助成金は今年度9月に学会で本知見を発表させていただくための費用として使用させていただく予定です。

阿部 由香梨

この度は研究助成に採択していただき、ありがとうございます。助成をいただいたことに恥じないような研究をしなくてはと、身の引き締まる思いでおります。

私の研究テーマは、「日本人英語教師の、批判的思考力を指導することに関する自己効力感」です。私は高校の英語科教諭として10年ほど、英語ディベート指導に携わってきました。その中で「思考力と言語力の密接な結びつき」に気づき、さらに深く言語習得について学ぶため、休職してオーストラリアで修士課程を修了しました。修士論文のテーマは「日本人英語教師と学生の英語ディベートに関する認識」でしたが、英語ディベートによって、特に批判的思考力が良い影響を受けるという認識が示されました。しかし、英語ディベート自体はまだまだ学校で活用されておらず、批判的思考力も、基本的には日本の教育において明示的に扱われていないように思われます。

こうした背景が、今回の博士論文のテーマにつながっています。まず、教師は「ディベートが批判的思考力を伸ばす」という評価をしているものの、批判的思考力についてどんな理解・誤解をしているのかを明らかにします。さらに教師の「自己効力感」についても調査します。これはある行動に対しての自信レベルのようなもので、教師のあらゆる行動に影響を及ぼすとされています。今回助成を受けた研究においては、日本人英語教師の認識についてさらに深く研究し、より効果的な教師教育に応用していく所存です。

TAO ZHIHAN

この度は、助成に採択してくださり、まことにありがとうございます。助成に採択していただけることによって、自分の研究テーマに自信をもつことができ、今後の研究の励みとなります。

私は、近代日本の船旅をめぐる想像と記号の消費について研究しています。移動/モビリティーズの重要性を考えた上で、鉄道、自動車、飛行機など、移動を媒介する「メディア」が焦点に当てられます。ところが、グローバル化を考えると、なぜ「船」が入っていないのかという問いがあります。近代社会において異文化の交流を支えてきた交通方式として、その移動の文化史への解明を試みます。

これからの研究は、大阪商船株式会社が発行した雑誌『海』（1924-1943）がもつ機能を解明しつつ船旅の表象の創出と、そのイメージ共有のなかで船への役割期待を明らかにします。『海』は、多くの文化人が登場したメディアとして、文化誌の性格を備える雑誌でありながら長い時間を経て社会全体の文化や規範に影響を与えることがあり得ます。研究手法として、テキスト分析と歴史資料分析を中心に行っていこうと考えています。

いただきました助成金は、資料収集のための費用にあてる予定です。本研究で得られた結果は、学会発表及び論文執筆の形で発表いたします。ご支援をいただきましたことに改めて感謝申し上げますとともに、有効に活用できるよう研究に邁進する所存です。

嶋見 優希

この度は、京友会研究助成事業にご採択くださり、誠にありがとうございます。

私たち描画研究会は、今回助成を頂く研究において、オンラインカウンセリングと対面カウンセリングでの描画法における体験の違いについて、調査を通して検討していきます。

コロナ禍において、接触を避け利用することのできるオンラインカウンセリングは改めて注目され、感染のリスクを避けるために用いられてきました。オンラインカウンセリングでも対面と同様の効果が多くの場合得られることは、様々な研究で指摘されてきています。また、カウンセリングでは、対話の他に描画法や箱庭療法といった投影法と呼ばれる技法を用いることがあります。この技法は、クライアントの無意識の動きを捉え、クライアントの見立てに活かすことができるだけでなく、体験自体が治療的に働くと言われていています。ただし、これらの技法は対面状況を想定して開発されたものであり、オンライン状況であっても問題なく効果があるのかどうか、十分に検討されてきているとはいえません。

そのため今回の研究では、オンライン状況と対面状況の両方において描画法を体験してもらい、それぞれの体験についての語りの分析と描画自体の分析を通して状況による体験の質の相違点を検討していく予定です。この研究によって、オンライン状況で描画法を用いることの限界と有用性の一端を明らかにできると考えています。

いただきました助成金は、調査費用として活用させていただきます。貴重なご支援に厚く御礼申し上げますとともに、本研究が心理学の発展に寄与するものとなるよう、全力で取り組んでいきたいと思っております。